

第164回山口西田読書会(2018年3月03日)

第163回の(2018年2月24日)プロトコル

テキスト 西田幾多郎 『働くものから見るものへ』

「直接に与えられたもの」9頁からもう一度読む。

構成的思惟の所興とは、非現実的なものでもなく、過去にあったものでも、未来に起こるべきものでもない。現実には与えられたものをいうのである。

その後、12頁 この如き思惟に対して～

カントの所謂物自體というものが、全く認識以前として意識に含まれて居ないとするならば、我々の認識の限界として考えることすら不可能である。真に構成的思惟に対して与えられたものは、構成的思惟の内容を内に含んだものでなければならない。厳密に考えれば構成作用に対して、形式と材料とは無関係とは考えられない。(受動的なるものは材料となることはできない。)特に芸術的理念は形式と材料の統一でなければならない。直接に与えられた経験内容は単なる材料でなく、(受動的でなく)経験の中に含まれたる関係によって我々の経験界が定められる。(この意味において構成的思惟の作用は一種の芸術的形成作用の性質を有すると考えることができる。)

「高次的立場の自覚」に対しての質問に佐野先生は、限界を超えたところから、限界の内と外を見ることである、との説明を受ける。

21頁 それで構成的思惟に対して～

それで構成的思惟に対して直接に与えられるものは、直観の世界(芸術家の見る如き)であり、意志の対象界でなければならぬ。思惟によって構成していくというのは既にその中に含まれたものを見出していくのである。認識作用というものは、直接与えられたものの発展の過程と見ることができる。

佐野先生よりの説明。

西田は、偉大な人物(哲学者)になりたかったと本に書いてある。

また明治30年頃の日記には多くの哲学者の名前が書いてあったが、終わりの頃には、ルソーのみで他はゲーテとか聖書等になっていく。

その後、接心(攝心)により変化したと言われている。

また、鈴木大拙の哲学批判「妄想録」を読む。

そのようなことがあり次第に哲学に傾いていくようになる。

22頁 意識現象はそれが～

意識現象はそれが如何に小なるものであってもその中に無限の発展を含み、その本質において創造的である。構成的思惟が客観的経験界を構成するには、その根柢に主客合一の立場、(事行の立場)がなければならぬ。

フィヒテの事行についての説明を受ける。

事行の発展とは、反省が反省を含んで更に反省していくことである。

以上のように、思惟我に対して直接に与えられた客観的或者として立つものは、主客合一の芸術的直観の如きものでなければならない。これをいわゆる直接経験とか純粹経験というべきものであろう。現実の意識は無限に深く大なるものを中に含んでいるのである。（構成された有限の自己を中心として考えていては、主客合一の立場、事行の立場にたてない。）

哲学的問い

「与えられたもの」、とか、「与えられる」とは何か？

何によって与えられるのか。

23頁等